

## 漱石に及ぼした英文学の本質

杉 山 和 雄

立教大学教授福田清人氏は昭和38年10月朝日新聞の文芸欄に漱石の逸文として次のような文章を記載された。

雑誌「世界的青年」は明治39年9月、東京有楽町の有楽社から創刊された青年指導書ともいべき毎号80頁程の小雑誌であった。

漱石の文章が載っているのはその創刊号で、そこに漱石は「余が一家の読書法」と題して原稿紙5枚程に自分の読書法を述べている。

その内容は、その書物に記載した事実学理を記憶し、もしくはこれを理解感知するという読書目的の他に、たとえその書全体を読了せずとも、暗示を得る方法があると創造的読書法をまずあげ、次に、甲書と乙書の思想上の関係を発見するような心構えで読書することの必要を説き、その例として、整正と筋とを尊んだ Aristotle の見地と、Matthew Arnold の戯曲の見解の歴史的研究が共通関係のあることを看取するようなことだと述べている。

そしてこの読書法は機械的に詰込むというより自発的態度と精神で、読書し得たところから何等かの新思想を得、また一種の系統を得るよう心がけるべきであると結んでいる。福田氏はこれが漱石の読書法として述べた唯一の資料であると思うといっている。

これを更に要約してみれば、読書にあたって読者はその内容を逐字的に暗記するのではなく、直観的に、総合的に、他書と関係して内容を把握し、その中から何等かの系統的思想を看取するようすすめているのである。この読書方法は実際漱石が実行してきたもので、例えば、Maeterlinck と Ibsen, Willian James と Bergson, 又 Bergson と 禅書の関係などがそれである。

漱石は自己の創作方法として、作家は何等かの人生観をもち、それを作品の表面に押し出すことなく、具体的人生描写の中にひそめ、読者がそれを読んで、その中からおのずからその人生観を悟るようにすべきである、と3回も繰返して述べているが、上述の読書方はこの彼の創作法と表裏をなすもので、読者の側でのかかる作品の受け入れ態度を述べたものである。

私がここでこの逸文からヒントを得て述べようとしているのは上記のことではなく、彼が甲書と乙書の思想関係を発見するために一例として挙げた、整理と筋とを尊んだ Aristotle の見地と Matthew Arnold の戯曲の歴史的研究が、共通関係をもつといったことについてである。

彼が教職を辞し、朝日新聞に入社し、彼の創作家としての人生観文学観を「文芸の哲学的基礎」に発表したのは明治40年4月のことであった。従ってこの逸文を書いた頃は内々創作家となることを決意し、創作家としての必要な人生観文学観を組織立てることを真剣に考慮していた頃であったに違いない。

彼は人生観文学観を組織するに当って主として参考にした先輩の名を明示していないが、彼がそれとなく言及したり、推奨している哲学者や文人、例えば、W. James, Ibsen, Maeterlinck, Bergson 等は、多かれ少かれ彼の人生観文学観の形成に寄与しているのである。彼がここで語った Aristotle も Arnold も、W. James とともに彼の「文芸の哲学的基礎」の根拠となった人々であると私は信ずる。

ではどのようにこのギリシャの哲人と英国の文学批評家が、それに関係しているかを探べてみよう。

まずアリストテレスから述べることにしよう。漱石の蔵書の中で Aristotle の書は、

The Ethics of Aristotle, (The Nicomachean Ethics)

Trans. by D. P. Chase, newly revised; ed. with Introductory

Essay by G. H. Leaves, London: W. Scott. (Scott Library)

の一冊だけである。博学の漱石のことであるから、彼はこの哲人の他の書も読んでいたに違いないが、ここで Arnold と比較しているのは確にこの本によったもののように思われる。

この書の中で Aristotle は漱石のいうように、倫理について彼の哲学観とともに整然と系統的に論述している。しかし何よりも漱石を惹きつけたのは、彼がこの書の中に自分の自己本位、個人主義の理論的根拠の一つもなるべきものを発見したことであろう。それは次のようなものである。

自愛主義の人々を非難するのは、彼等が財貨や名誉や肉体的快樂を貪ることを人生の目的とし、人と争ってまでもそれらを追求し、それを得て満足だと考え、理性を忘れ、情欲の擒となっているからである。

Aristotle はこれが世人の実状であり、自愛主義がこのようなものであれば非難されるのが当然であるといい、これに反し、真に自愛主義の人は、正義とか節制とか、徳に即したもろもろのことを他の如何なる人よりも常に努めて実践し、そのような徳を独占している人のことであるといっている。これは漱石の個人主義の理想であった。

次に Aristotle は人間の行為の選択に当ってその目的となるのは人間の善であって、最高善は幸福だといっている。

そして人間の善とは人間の徳に即しての、たまたもしその徳がいくつかあるときは最もよき徳に即しての精神の活動であるといい、又一方善とはそれぞれの異った行為とか技術とかに於て、それぞれ異なるものである。それはそのために他の万般のことがらがなされるころのものにほかならない。医学においては健康が戦争においては勝利が建築においては家が、その他に於てもまたそれぞれ異ったものが、それぞれの行為や選択の目的であるといっている。彼のこの説明によれば、善とは人間のあらゆる行為の理想であると解せられる。又その理想は皆徳に即したものであるとすれば、漱石が彼の人生観の形成にあたって、行為の選択の基準を James のイントレスト（利害関係）から理想にきり替え、彼の文学観も頗る倫理的とな

っているのも、Aristotle の影響によらないとは断言できない。

Aristotle は又人間生活が運を必要とするのは余分のものとしてであり、幸福のために決定的な力をもつものは徳に即しての活動にほかならないといい、又選択は欲求の理性乃至は理知的欲求であり、我々が怒ったり恐怖に陥ったりするのは非選択的である。思慮することは勤ではない。勤は合理的根拠を欠いているからだといっているところから、彼が理性を本能的神秘的なものとせず、知性と等しくみなしていたことが分る。

以上のように W. James の心理主義哲学と Aristotle の倫理哲学によって、漱石の「文学の哲学的基礎」が出来上ったものと想像することができる。

今度は Aristotle との連関の下に Arnold が漱石の文学観に影響を及ぼしたと思われるところを述べてみよう。漱石が自己の文学観形成にたって自分が専攻した英国文学における批評の先駆者であり、第1人者であった Arnold を研究し、これに範を求めようとしたのは当然である。

この逸文でいっている Arnold の戯曲の見解の出所が分からないので正確に知ることはできないが、彼が Shakespeare を詩の最高標準としているところを見ても、戯曲といっても劇詩に重きを置いたもので、彼の一般の詩論とそうかけ離れたものとは考えられない。それ故ここでは彼の詩論（といっても実際は一般文学論）のどの点が Aristotle 的であるか、又どのように漱石の文学観に影響を与えているかを探求してみよう。

まず第1に2人とも個人主義的であることである。Aristotle は中庸の徳に基づいて個人は自らの、又君主や家長は各々自分の国民や家族の成員の幸福をはかるべきことを説き、Arnold も個人の教養を高めることによって、社会国家も真に向上完成することを主張している。

次にともに倫理道徳を最も重視していることである。前述のように、Aristotle の善も徳も神の能力と異った人間精神の活動であって、何等先験的神秘性を有するものではない。Arnold も英国哲学伝統の経験主義者

であって、文学を人間の研究だとし、詩の神秘性を排した人生派の文学者であったことは、彼の有名な「詩は人生の批評である」という言葉が最もよく立証している。

Aristotle は善と徳とを強調したが、Arnold は教養ということを唱え理想を力説した。彼によれば教養とは

「われわれに最も関係の深いことからつき世界のうちで考えられ言われた最良の事を知って、自己の完成を求める。」

というのである。これは理想を自己完成の目的とするということに他ならない。又彼は詩の理想とは人間生活に関する厳粛な倫理的観念の芸術的表現だと唱えている。彼の教養は Aristotle の善や徳と等しく、宗教を必要としない知性の活動の上につつまのものであった。漱石の文学論は心理の説明を除けば Arnold のそれと殆んど同じである。彼の文学論が Arnold に範を取っていることは次の諸事実が証明している。漱石はかつて石田憲次氏に文学に関し Arnold は suggestive であると語ったことがある。又彼の英文学形式論（明治30年4月—6月）の講義の中で

「文体に於て明瞭と順序を尊ぶのは知力の流れを妨げられない為めである。Matthew Arnold の文章の名文たるは、此要求を満足させ読み去って何等の障害を感じない点にあると思ふ。」

と彼の文体を褒め。又「文学論」（明治39年）には

「概括的真理。此種の F にして f を喚起し得るもの多きは上述の如く、又其性質の如きも一言説明したればここに、繰返すの要なかるべし。凡そ此等 F のうち最も吾人の注意に値するは各国固有の俚諺にありとす。或は其賢哲の格言に於ても亦之を求め得べし。或は名流の小説、戯曲に著者自身の言として或は作中人物のそれとして現はれ来ることもあるべし。而して是等は皆直接に人生の利害に深き関係を有する経験を僅か 1 句にまとめたもの或は賢人ありて其生涯の抱負を適切なる数語に結晶せしめ得たるものにして、試みにかの epigram（詩銘）又は諺を集めしものを繙くに、吾

人は其名句に富み、これを大にしては M. Arnold の所謂「人生の批評」なる目的に叶ひしものなるを是認すべし。

Milton は云へり。

“Nore love thy life, nore hate; but thou livs't

Live well; how long or short permit to Heaven.” (*Paradise Lost*)

“The mind is its own place, and in itself

Can make a Heaven of Hell, a Hell, of Heaven.” (*Ibid.*)」

又この「文学論」の中で自分が先に知的といったのは Arnold が moral idea と称したものと大差がないといっている。従ってここでいう概括的真理とは moral idea のことであろう。

(註、彼の moral idea というのは Voltair の idée morale と同様な意味に使われたもので、大体现代でいう軽い意味の人生観と見て差支えない。)

俳句を好み俳句で鍛えた漱石が epigram や aphorism のような簡潔で知的含蓄の多い、そして詩的な文章を好んだことは確で、彼がそのような文体で書かれた Meredith の小説や Shakespeare の劇を興味をもって研究したのは、主としてのこのような文体のためでもあったと考えられる。彼自身の文体も「虞美人草」までは明かに、半ば無意識であったろうが、これらの人々の文体を真似ているように思われる。

漱石が「文芸の哲学的基礎」で主張している文学観は、作家がまず真善美壯の理想的人格を形成し、その理想を巧みな技巧によって表現し、読者にその理想を伝えることであった。Arnold は高貴な人格のおのずからなる現れとしての文学の美を認め、これを grand style とよび、そのような文学によって人々の教養を高めることが文学の目的であるとしたのである。

彼は享楽のみを重んじ、ムードのみをこととする文学観を顧みなかった。

上述のことを考え両者の文学観を比較して見たならば、Arnold が漱石の文学観形成に大きな役割を果していることは否定出来ないと思う。

元来彼は自ら「文学論」の序や其の他で述べているように、大学で英文

学を専攻したのだけれども、英文学はおろか文学とは何であるかが分らなかったのである。文学書によって文学の如何なるものであるかを知ることが出来ないことを悟った漱石は、ロンドン留学中それを人生との関連の下に、特に心理学社会学の研究によって根本的に究明せんと思いついたのである。これは彼が一つの人生観を打ち建て、それから文学の意義を発見しようとしたことを意味する。そこで彼は今まで読んでいた英文学書を読むことを止めて哲学心理学社会学の研究を始め、あの心理学的人生観を打ち建てたのである。

それ故彼が当時の英国における文芸批評家の第1人者であり、あのような人生のための文学観を唱え、文学の研究を人間の研究と見た Arnold の文学論に共鳴し、それを範にとったことは頗る自然のことであった。漱石の「野分」は明治39年12月21日に脱稿したのであるが、Arnold の詩は人生の批評であるということをも具体化した作品のように見える。

漱石は文学を変愛のみ描いたり、娯楽だけのためのものと見るには余りに識見が高く理想的であって、そのような見方に飽き足らなかった。彼は文学を確乎たる理想的人生観のおのずからなる表われとし、それによって Tolstoi や, Hugo のように人間に how to live well を教えようとしたのである。

あの逸文の中で読者はその作品によって何等かの新思想を得、また一種の系統を得るように心がけるべきだといっているのは、彼が三回も繰り返して力説している彼の創作方法に通ずるものである。

その創作方法とは作家は自己の人生観をよく血肉化し、具体化して作品の中に盛り込み、読者をして暗に体得せしめるようにすべきだといっているのである。

彼は教職を辞し、作家を本業とするに当って、まずこのような自己の人生観文学観を打ち建てる必要があると考え、主として自分が共鳴した Aristotle, W. James, Arnold によつてあのような人生観文学観をたて

てそれを「文芸の哲学的基礎」として発表したものに違いない。

同じような社会環境が同じような思想を生み出すことはよくあるとこである。19世紀の初めナポレオンを撃破して以来英国はあらゆる方面に名実共に世界に覇を唱えた。

ヴィクトリヤ朝は平和と隆盛繁栄の時代であった。民主主義政治機構や社会組織が安定し、科学の進歩の結果機械工業が急速の発展を遂げ、広大な植民地も加え、世界各国との貿易により商工業の隆盛は国富の空前の膨脹をもたらした。

文化方面においても教育が一般民衆の間に普及し、出版物は増加し、博物館図書館が公開され、ガス電気が使用されるようになり、通信交通機関は整備された。かくて一般国民は平和を謳歌し、生活は便利となり安易となったのである。このような生活の安易と世界の一等国民だという誇りが高くなるにつれて、国民の心は奢り、緊張を失い、怠惰安逸奢侈の気風が流行し、精神生活の重要さは忘れられ、物質文明の享楽のみが人生の目的だと考えられるようになった。そして実証主義の普及につれ神の存在が疑われ、理想主義は顧みられなくなった。

Carlyle は「衣服哲学」を著してこの傾向に警告を与え、誠実と勇気とをもって当時の機械的物質文明の欠陥を猛烈に非難攻撃した。漱石も Carlyle の精神主義に共鳴していたようである。特に Carlyle が「英雄崇拜論」の中で詩人を英雄と見ているところは漱石に強い感銘を与えたとと思われる。後に彼がロンドン留学中訪れた Carlyle の旧居の訪問記を書いているのはその証拠である。

Arnold もまた国民が機械文明を重視する余り、精神的なものの人生における重要さを忘れていたことを誇張して説き、国民が陥っている物質万能の俗風を脱する方法として教養の必要を説いたのである。前に述べたように教養によってまず個人の人格を高め、それによって社会国家を完成



に導くというのが彼の理想であった。

Arnold が教養のない俗物とみなして、非難したのは、商工業に従事し、社会的には勢力があったが、金儲けとティーパーティと低級な議論で自己満足している中流階級や、或る程度の教養はもっていたが、真の知識を求めようとしない、権力や快楽を追うことをこととしてゐる貴族や、それに無知な労働者階級の人々であった。Arnold が文学によって教養を説いたのはこれらの人々に警告と自覚を促し、光を与えんがためであった。

英国のヴィクトリア時代と漱石の過した日本の明治時代は根本的には違っていたが共通点も多くあった。根本的相違というのは英国の政治が真に民主主義の原則に基づいて行われ、その繁栄と隆盛が主として国民自身の手によってもたらされたもので、個人の自由が重んじられていたのに反し、日本の政治は名義上は立憲政治であっても、実質は絶対的天皇制の下に藩閥と財閥の結托によって支配され、半封建制の如き観があったことである。そのため国民は物心両面に互って自由が束縛され、ヴィクトリア朝の人々のようには自由を楽しむということはできなかったのである。

自由主義を原則とする資本主義は導入されたが、政府、軍部と結托した財閥が貿易や重工業の重要部門を独占し、民間の中小企業との利潤の間に大きな差があった。又農業は近代化が進まなかったため農民の生活水準は極めて低かった。工場はこれらの低水準の農民や失業農民を吸収し低賃金で使用したため、一般工場労働者の生活は苦しかった。従って貧富の差が著しくなり、少数の富者と多数の貧者とに分れた。高等教育は役人や成金や地主の子弟の独占するところとなった。そして富者の大部分はその財を物質文明享楽のために散じ、精神生活の向上などということは余り考えなかった。(尤も中には子弟の教育に力を注ぐものもあって、精神文化が保たれ向上したのは彼等の力に負うことが大であった)。一方多数の貧民は生きてゆくのに手一ぱいで、文化の恩恵にあずかるところが比較的少なかった。しかしこのような差があったが、維新以来の文明開化は外国との交通

の頻繁になるにつれ急速に進行し、交通通信の設備、教育の普及、言論出版機関の発達、資本主義的産業革命等々物質文明の発達は目覚ましいものであった。これを徳川の鎖国封建時代に比較すれば雲泥の相違があった。

精神文化の方面においても、キリスト教が流入し、教育の普及と共に種々の学問が輸入され、長足の進歩を遂げた。それに日清日露の戦勝は国民に世界の一等国民であるとの誇りを与え、国富の増大と一般文化の発達と相まって彼等に日本は東洋の英国であるという感を抱かしめた。

このようにヴィクトリヤ時代の英人の弊害に通ずる有産階級の怠惰と奢侈、物質謳歌や、無産階級の困窮を救うのは、絶対的天皇制の下に社会制度の改良を許されなかった明治末年においては、個人各自の自覚にまたなければならなかった。

漱石が Arnold に学び、文学により個人の自覚と教養を高め、これらの弊害を救おうとしてあの理想主義的な文学観を樹立したのだとも考えられる。

漱石が人生観を作るに当って意識の流れの選択の基準をイントレストから理想にかえたのは、理想的な彼の性情によるものが大であったろうが、Aristotle の善や Arnold の教養にサジェストされたことも又大であったと考えてよいと思う。

Arnold の教養は宗教を必要としない理性の活動の上になつたものであった。そして彼の理性というのはソクラテス風の形而上的なものではなく、アリストテレス風な経験的理知的なものであった。一般に彼の思想は英国伝統の経験論的、現象的哲学に基づいているものである。抽象的理論は英人の得意とするところではない。Arnold は読者の精神生活を高める程度に従って作品の価値を判断したのである。人間精神を高めるものに宗教や哲学の書がある。しかし抽象的に書かれた哲学宗教論には実践的の裏打ちがない。人を動かす力がない。文学は哲学や宗教上の思想を具体化して表現するからその効果は一層大であると彼は考えた。Carlyle は文学作品を

批評するに歴史的・伝統的立場にたった。そして文体には特別に芸術的注意を払わなかった。従って彼の作品は歴史的記録か、倫理の書の観がある。Arnold も又伝統的立場にたち倫理を重視したが、彼は又漱石が褒めているようにそれを芸術的に表現した。彼は教養による人間生活に関する厳肅な倫理的観念の芸術的表現を詩の本質とし、教養による高貴な人格のおのずからなる現れとしての文学の美を詩の理想と考えた。これは漱石の文学観と完全に一致している。Arnold も漱石も詩を理想的人格のそのままの表現と考えたのである。漱石は英文学を専攻したのであるから意識的にも無意識的にも、英文学から影響を受けていたことは疑えない。そして英文学の特性であるユーマとか知的詩美とかローマン的なところは彼の前期の作品に顕著である。英文学の本質は Arnold を直系とする伝統的な経験的・实际的・道徳的・人生派の文学である。従って漱石が文学観において Arnold と同質のものであれば、漱石は英文学の本質を学びとったといえる。そして彼が Arnold に範をとって作り出した倫理を重視した理想主義の文学観は終生変わらなかった。「虞美人草」は Meredith の *Egoist* にヒントを得て、詩の偉大性を作るものは、絶対的真摯から生ずる高貴な厳肅さであるという Arnold の文学観を藤尾の死によって立証したのである。彼が「倫理的にして始めて芸術的なり。真に芸術的なものは必ず倫理的なり。」といったのは彼の晩年のことであった。しかしながら拙著「夏目漱石の研究」で述べたように、漱石の理想は「虞美人草」を書き終った頃から変化していったのである。彼の理想は経験的なものから先験的なもの、人間の理智が作った道徳的理想から神そのものに向って進んだのである。それ故彼の理想的文学論は外形は変わらなくても内容が変わったのである。最早や経験的 Arnold の文学観を離れて、経験的心理学から深層心理学の方へ、叡智とか本能とか良心とかを取扱こう大陸文学に接近していったのである。従って漱石の作品は「虞美人草」を境として前期の作品を英文学的とし、後期のそれを大陸文学的だといえることができると思う。